

## シチズンシップを育む教育活動に関する基礎的研究 (1)

——C.A.ビアードのシチズンシップ教育論——

志々田まなみ\*

### はじめに

平成8年の中央教育審議会答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について(一次答申)」により、生きる力の育成が我が国の教育課題として注目されるようになって久しい。「変化の激しい社会」に対応し、子どもたちが自己主導的に諸課題を解決するための資質、能力と豊かな人間性を育成することが教育目標に掲げられている。子どもたちが社会に出て遭遇する問題は、当然のことながら従来の教科学習の枠を超える内容であり、問題解決のプロセスも複雑である。そのため学校では、カリキュラムによって基礎的知識を獲得させるとともに、それら知識と様々な体験や技術を組み合わせて活用する能力を育てることも必要となる。そのような企図のもと導入されたのが、総合的な学習の時間であったし、これにより様々な教科横断的な学習が試みられるようになった。

近年、こうした教科横断的な学習活動によって獲得できる資質や能力に関しては、アメリカ合衆国のサービスラーニングやキャラクター・エデュケーション、あるいはイギリスのシチズンシップ・エデュケーションやパーソナル・ソーシャル・エデュケーションなど、海外の学習実践に着目した研究が、数多く行われている。しかし、こうした海外実践を生きる力のもう一つの構成要素である豊かな人間性の育成に着眼し、分析している研究は、あまり多いとは言えない<sup>(1)</sup>。そうした理由のひとつとしては、資質や能力に比べ、人間性は、当該国での道德観が大きく反映されているため、分析しづらい点があげられよう。教科横断的な学習であっても、教科各々のディシプリンを手がかりにし、育成できる資質、能力を把握することは可能だろう<sup>(2)</sup>。しかしそれに対し、豊かな人間性の育成の場合、なにをもって「豊か」だと判断するのかでさえ、大いに議論がなされるところだろう。

---

\* 広島経済大学経済学部講師

そうした問題意識から、これら諸外国の事例を概観してみると、英米いずれにおいても、シチズンシップを教育目標に設定し、子どもたちの社会的、道徳的行動、あるいは主体性や自発性といった態度を育成しようとしていることがわかる。シチズンシップは、我が国の道徳教育や社会科教育の分野で、その重要性が強調され始めた概念であり、生きる力としての豊かな人間性について検討するうえでも、有益な示唆を与えてくれるはずである。

そこでまずは、シチズンシップを育成する教育活動を検討する準備段階として、シチズンシップが教育活動として注目されてきた歴史的経緯に注目することとした。シチズンシップは、「市民性」という邦訳があてられることもあるように、もともと理想的な市民のあり方を指し示すものとして、欧米諸国で18世紀から20世紀初頭にかけて発展している。特に、アメリカ合衆国では、第一次世界大戦終結後から第二次世界大戦開戦までの戦間期において、移民問題や産業構造や就労形態の変化などによって起きた様々な社会的混乱をおさめる方途として成人教育分野において注目され、多くの議論がなされている。本稿では、この期のシチズンシップ教育の論客のひとりであった、歴史学者、経済学者のC.A.ビアード(Charles Austin Beard)の論に着目することとした。彼は、成人教育ばかりではなく、学校教育での社会科や公民科の開発にも携わってシチズンシップの重要性を論じており、アメリカ合衆国のシチズンシップ教育に多大なる貢献を残した人物である。彼が主にその成人教育活動のなかで論じた言説をもとに、本稿では、シチズンシップの育成が重要視された時代状況と、彼が目指したシチズンシップ教育の様態について明らかにしていくこととする。

## 1. 「理想と理想の戦い」の時代

ビアードの社会科学の基礎に関する著作『社会科学の本質』から分析すると、彼がすべてのアメリカ市民の「一般的な資質」として考え公民科(civics)とは、歴史学、政治学、経済学、文化社会学の大きく4つの分野から構成されていることがわかる。<sup>(3)</sup>カーネギー財団成人教育準備委員会の備忘録に残されたビアードの発言からは、彼がこの公民科を労働者や青少年、移民など、あらゆる人々に普及することを自らの使命に据えていたことを窺うことができる。<sup>(4)</sup>実際、1920年代に彼が携わった社会的活動を概観してみても、成人教育運動だけではなく、学校教育でもその普及をはかるために全米教育協会(National Education Association)の社会科教科書作成のプロジェクトに参加していたり、移民教育分野においては、同協会の移民教

育部（のちの成人教育部）でアメリカナイゼーション運動に協力している。

なぜ彼は、これほど多方面から強力に公民科を普及しようとしたのであろうか。その意図を探っていくと、彼が危機ととらえた当時の社会状況と深く関係していることがわかる。その状況をうまくたとえているのが、以下の一節である。これは、1937年、アメリカ成人教育協会（American Association for Adult Education）の機関誌『Journal of Adult Education』にビアードが寄稿した「Ideas： An Inquiry」と題する小論のなかで述べられた文章である。

「古き時代、戦争の指導者たちは、『隣国は、豊かな富をもっている。その富を奪うため、戦おうではないか』と単純な主張をし、それで男たちの士気も鼓舞することができた。（中略）しかし概ね、今の指導者たちは、そんな粗暴な言い方はしない。（中略）（第一次世界大戦で）ドイツとの激しい戦いをしていた時期、ウィルソン大統領が、アメリカ国民の団結を呼びかける演説において、『ドイツ人が連合国軍を撃破するようなことがあれば、アメリカの銀行家と実業家たちは多額の資金を損失することになってしまう』などと声を張り上げている姿を想像することなどできなかった。事実、ウィルソン大統領は、理想主義のもと、アメリカ参戦の意義を国民に訴え、アメリカの物質的な利益については一切語らなかった。（中略）（ウィルソン大統領がやったように）、独裁者ヒトラーやムッソリーニは自らの権力を強化するために、軍事力の行使だけではなく、理想(idea)の主張をおこなっている。もはや、プロパガンダとの戦いとは、理想と理想の戦いになったのだ。」<sup>(5)</sup>

ビアードは、戦争とは今も昔も、物質的な利益を増やすための行為であることに変わりないと考えていた。こうしたとらえ方は、常に政治と経済の視点から歴史を見た「科学的歴史観」<sup>(6)</sup>と呼ばれる彼独自の歴史観に基づくものであるといえよう。彼がその代表的著作『合衆国憲法の経済的解釈』で、アメリカ建国の父たちが「各自の個人的・経済的考慮のもとに国家憲章の制定にたずさわった」<sup>(7)</sup>と述べたように、彼は、戦争をふくむすべての政治的決断は、「一部の有産階級の経済的、社会的地位と利益の擁護」<sup>(8)</sup>と無関係ではないと考えていた。このような政治制度への批判的なまなざしこそ、彼が革新主義期の代表的な論客にあげられる理由でもある。

時代とともに、戦争指導者たちは、理想を語ることによって、物理的な利益への関心を隠すようになり、いまでは多くの人々があたかも「理想のために戦い、死んでいる」<sup>(9)</sup>ように思いこんでしまうようになったと、彼はいう。ウィルソン大統領が説く理想も、ヒトラーやムッソリーニといった独裁者が語る理想も、おなじ理想であることに変わりなく、プロパガンダとは、単にそれが敵国の指導者が語る理想で

あるに過ぎないものになっているとピアードは述べている。<sup>(10)</sup>

彼が「理想と理想の戦い」という言葉で喻えた当時の状況とは、その事例通りの政治的イデオロギーの戦いだけを意味するものではない。こうした時事問題を引き合いに出しながら、彼は、ものごとが単純でわかりやすかった時代から、いくつもの理想が併存し複雑化する時代へと変化したことを説明している。彼は、知の大衆化や専門分化の進展によって、大量の知識や情報が次々と押し寄せ、ものごとを理解することが複雑になり、「判断することや、選択することが困難となって苦慮する」市民の日常生活も、個人一人ひとりにとっての「戦い」と表現している。そして、いまや社会は、「人々が見解の多様化にとまどい、混乱する」まるで「迷宮」のようだと喩えている。<sup>(11)</sup>この「戦い」の激化によって、市民が精神的に混乱し、疲弊してしまうことこそ、ピアードがもっとも憂慮した20世紀初頭の社会危機だったのである。

むろん、民主主義を信奉するピアードにとって、多くの理想が語られる状況自体が悪いと考えたわけではない。彼が問題としたのは、何を信じたらよいか混乱し、不安になっている状況につけ込まれ、特定の理想を信じるよう市民が扇動されてしまうことや、あるいは市民自身が葛藤することに疲れ、自ら理想の吟味を放棄してしまうことであつた。

「大きな力を使って、世界の至る所でさまざまな問題を起こしている人たちの多くは、固定的観念という、たった一つの理想しか持っていない者たちである。  
(中略)圧倒的多数の人々と同じ理想を信じることが、正攻法だと信じてしまいたい気持ちはだれにでもある。しかし、ほかの理想を排除していき、理想を単純な構図にして、一つあるいは少数の理想に基づいてすべてのことを考えるようにさせることが、独裁政治の常套手段であることも、また事実である」。<sup>(12)</sup>

これを回避するには、何はともかく社会状況を理解するための基礎的な力量を、すべてのアメリカ市民につけさせねばならないとピアードは考えた。人々は、「この世に存在するすべての選択可能な事柄について把握すべきだ。そしてこれまでの人類の歴史において、ある選択を行った者たちが、いったいどのような結果に遭遇してきたのか、その事例も知るべきだろう」<sup>(13)</sup>と彼は言う。「(社会科学を学ぶことによって得られる)情報などを頼りにして慎重な判断ができるようになっていなければ、自己責任の結果としてのリスクを伴う選択やその実行など」<sup>(14)</sup>できるはずがないのだとも。

「人生の難局に立ち向かう」<sup>(15)</sup>最低限の力を保障することが確保されていなければ、あらゆる選択には常に困難がつきまとうし、なかには、判断や選択から逃避してし

もう者さえ出てしまう。彼が、成人教育をふくむすべての教育活動の目標に公民科を据えたのは、そのためであった。実際、彼が考案した公民科は、子どもから大人までどんな者にも理解できるように様々なレベルのプログラムが開発され、教授方法にも配慮がなされている。あらん限りの方策でもって、新しい公民科教育を彼が急いで普及しなければならないと考えたのには、こうした背景があったのである。

## 2. 「文明思潮」(idea of civilization) の醸成

とはいえ、ピアードは、「社会科の教科書が、自動的に少年少女を共和国の理想的な市民へとつくりあげてくれる」など<sup>(16)</sup>と、楽観的に考えていたわけではない。

「学校などで行われる社会科によって、社会の進むべき方向性を理解することができるようになるのであろうか。おそらく、ある程度までならできるようになるだろうが。」<sup>(17)</sup>

なぜ「ある程度」しかできるようにならないのかについて、彼は、「社会科学にはそもそも限界があり、無機化学のように、いつも必ず一定の結果を導き出せはしない」<sup>(18)</sup>点を理由として指摘する。「複雑な要因が有機的に絡みあう現代生活」を取り扱う社会科学は、自然科学のように法則性を見いだすことは容易ではなく、「社会調査データを用いて」その法則を明らかにしようとする試みは、緒についたばかりだと述べている。

しかし、そうした短所がありながらも、それでもなお、彼は社会科学を学ぶ固有の意義があるのだと主張している。その根拠を、社会科学の対極にある自然科学と比較しながら、説明している。彼の言説によれば、「自然科学というものは、人間が何を選択するべきかということに関して、常に中立であり、何かを推奨したりするものでもない」<sup>(19)</sup>。それに対し、社会科学は「必要とあらば、あるべき社会の方向性を指し示す」<sup>(20)</sup>役割を担ってきたという。

「アリストテレス、マキアヴェリ、ホッブズ、ハミルトン、マディソン、マルクス、ケインズ、彼らはいずれも、単に社会現象がどのように起こるかその法則を明らかにするだけにとどまらず、自らの経験をもとに、あるべき理想の社会の枠組みまでも指し示してきた。」<sup>(21)</sup>

さらに、「あるべき理想を科学が語ることが危険だ」<sup>(22)</sup>という者もいるかもしれないが、社会科学が人々の現実生活の明暗に影響を与えうる力がある以上、たとえ「ある程度リスクがあろうと」、社会科学は人々の生活に応用されるべきなのだと、彼は堅く信じていたのである。その理由として以下のように述べている。

「もしも社会科学が、物理学のように絶対に間違いが起こらないように原因を徹底的に究明できるのであれば、すべての人が確実に納得できる社会科学の結論が導き出されるまで、何も考えずに生活していればいいだろう。しかし、現実にはそうしてなどいられない。だとしたら、何も考えずに危険に身をさらし、死んでいくより、ある程度の危険があろうと、社会科学を応用し、思考力や意志を適切な状態へと進められるようにするのが、賢明な人間の姿ではないだろうか。<sup>(23)</sup>」

こうした危機を少しでも回避し、公民科の学習の「応用可能性を高めていく<sup>(24)</sup>」ための策についても、彼は言及している。すなわち、著名な社会学者と同じように、すべてのアメリカ市民一人ひとりが、「単に社会の現象がどのようにおこるかその法則」を公民科の知識として学ぶだけにとどまらず、「自らの経験をもとに、あるべき理想の社会の枠組み」を考え、発言していくことが大切だと論じている。

そして、「理想と理想の戦い」に疲弊することのない社会を以下のように想定している。

「豊かに花開いた文明 (civilization) というのは、多様な理想を胚胎しながらも、さらにその多様性を促進しようとするものだ。こうした文明社会では、多様な理想を人々が受容するか拒絶するか吟味する過程において、また新たな理想が生まれてくる、といったことを歓迎する風潮をもつ。<sup>(25)</sup>」

この社会の理想を、彼は「文明思潮」<sup>(26)</sup> (idea of civilization) と命名している。このタームは、彼の思想的信条「ヒューマニズム」(humanism)を体現した「高次」の民主主義として、代表的な著作『アメリカ精神』のなかでも用いられているものである。「人間による人間の搾取、隷属を積極的に排除し、すべての人間の肉体的精神的<sup>(27)</sup>能力の無限の発展の可能性を保障する」<sup>(28)</sup> ヒューマニズムに立脚し、「現在における<sup>(29)</sup>将来への指標を見いだす」ことを教育活動に期待していたのである。

### 3. 新たな市民教養の創造

「文明思潮」を醸成するための教育には、一人ひとりの成人が社会科学の知識を学ぶこととは別に、もう一つ取り組まねばならないとピアードが考えた活動がある。

「いくつかの理想をそれぞれ分析したり、くわしく理解したりすること、さらにはそうやって理解した理想に関する自分の意見を述べたりするために用いる言葉の理解を深めることが必要である。こうした学習活動を教育者は学習者とともに意識的に取り組んでいかねばならない。<sup>(30)</sup>」

このような、ひとつの理想を記した書物において、その内容が客観的事実を記したもののなのか、それとも著者の意見や希望なのかをはっきり区別し、理解してみる。こうした学習活動を成人教育の重要な柱に据えている。

「無知な人間<sup>(31)</sup>というものは、自分が十分知っていると思っているものにだまされている」

哲学者サンタヤナ(Santayana, G.)のこの言葉を引用しながら、この学習活動を経なければ、「知識と、単なる他者の意見とが混同されてしまうことになり」、それが理想に「だまされる」原因になるのだと述べている。<sup>(32)</sup>

「それが知識なのか、単なる意見なのかを区別することが、何かを見通すためには必要である。しかし、人々はあまりそれをまじめには試みようとはしない。なぜなら、そうした試みは、痛みや戸惑いを必ず伴うことになるからである。自分が大切にしてきた信条が、単なる自分の持論に過ぎないと思い知らされることは避けたいと誰もが考えるのは、当然のことだろう」<sup>(33)</sup>

そして、自分の周囲で説かれている理想を常に検討するためには、まずは、自分が信じている理想や信条から検討を始めるべきだと指摘している。<sup>(34)</sup>

しかし、「持論の検討は、知識の獲得より困難である」<sup>(35)</sup>と彼が言うように、そこには「情緒的な感情」<sup>(36)</sup>がからまっているために問題が生じやすい。たった一人の個人の理想の中でも、こうした混乱が生じるのだから、それが社会全体となったらいうまでもない。「教えたがっていて、学びたがっていない」<sup>(37)</sup>、あるいは「議論をしているのではなく、伝えようとしている」<sup>(38)</sup>など、これら一方向的な「妄想」<sup>(39)</sup>の押しつけあい、現代社会の中での理想の混乱に通じていることを、彼は持論の検討を通じて、個々人の精神世界のなかで理解させたいと目論んでいた。それこそ、「教育の主要な機能」<sup>(40)</sup>なのだとピアードは指摘している。

さらにこうした力を高め、「現在における将来への指標を見いだす」練習となる教育として彼が想定していたのが、彼が同じ志を持った仲間たちと1919年に創設した労働者のための教育機関、ニューヨーク社会調査新学校(New School for Social Research in New York)の名称に冠している「社会調査」という活動であった。

「ヒューマニズムに立脚しながら世論を社会調査しようとする場合、いつも我々は、その当該地域の人々が考えている利害関心は何であるかを見つけ出すとする。そして、その利害関心の構造を解明していくと、たいていその利害をめぐって人々の理想が形成されていることがわかる。そうやって形成された理想はうまれるとすぐに広まり、利益としっかり結びつく。例えば、(中略)、1619年に実質的に始まったこの国の奴隷制は、200年あまりの間、経済的な側面

からみた理想、すなわちカルフーンの言葉にあるように『奴隷制は有益』という考えから、民俗学、宗教、倫理でも肯定されてきた<sup>(41)</sup>」

このように、政治と経済の視点から歴史を見たピアードの「科学的歴史観」は、社会調査にも見られる。「理想として語られること」や「信じたいこと」とは、必ず利益に結びついている事に着目し、社会調査をおこなうことで、信じるにたるべきものか否かを判断する力量を身につけられると考えたのである。

また、「人々は、自分たちの高い理想が、すべてに対し公平であると信じて疑わない。さらに、利益を稼ぎ出すことに余念のない実務家たちの語る理想は、とりわけ軽蔑する向きがある<sup>(43)</sup>」けれども、本当に持論の理想が自分の利益に関与するものではないといえるのか、と疑問を投げかけている。そして、調査や分析を通じて、それを検証してみるべきではないかと述べている。彼は、現状に対する「批判的なまなざし」をもち、「私利私欲につながる<sup>(44)</sup>」理想を分別し、禁欲的な選択をすることができる力量も、シチズンシップの要件に入れていたのである。

彼がシチズンシップ教育に期待したのは、それだけにとどまらない。彼は、市民が知識を身につけ、批判的に判断し、真剣に自らの選択を行えるようになりさえすれば、ヒューマニズムに基づく「文明思潮」が実現するとは考えず、さらにもう一つの力量を重視している。そのことを言い表したているのが、以下の一節である。

「数週間前、アメリカに駐在しているあるソビエトロシア人が言うには、彼の国の重大な問題は、若者たちが西欧文化について広い知識を持っていないことだそうである。1917年のあの革命によってマルクス主義者たちがイデオロギーの統制システムを作りあげ、それ以外の考えを軽蔑し、排除してしまったことが原因だという。(中略)多民族国家のなかで生きていくのなら、我々は文化的な基盤を少しでも広げていかねばならない。それなくして、我々はこの社会を理解し、生きていくことはできない。」<sup>(45)</sup>

二項対立的にものをとらえ、正誤を判断しようとするれば、必ず「口論」が生じ、他方を排除しようとしてしまう。他民族国家アメリカに必要なのは、「違いを厳密に分けることや、二手に分かれて論陣を張ることではなく、話し合いのなかから共通基盤を求める<sup>(47)</sup>」ことであると彼は考えた。そのための「自分たちの知性を調整する<sup>(48)</sup>」力を、彼は重要だと考えた。ピアードが「文明思潮」を説明した件で述べた「多様な理想を人々がそれぞれを受容するか拒絶するか吟味する過程において、また新たな理想<sup>(49)</sup>」を生み出せる力の育成は、ピアードがシチズンシップ育成の推進に込めたもう一つの企図であった。



## おわりに

有賀は、『アメリカの20世紀』のなかで、大量の移民流入や貧富格差の拡大による社会不満、あるいは共産主義といった民主主義を揺るがすイデオロギーの登場など、次々と社会的危機が噴出する20世紀初頭のアメリカ社会を主導したのが、「革新主義」であったと論じる。そして、革新主義にも様々な立場があるものの、主な潮流は、資本主義体制に適合する新たな社会秩序を打ち立てようとするものであったと結論している<sup>(50)</sup>。

こうした指摘を、本研究で論じてきた革新主義者ピアードの言説と照らし合わせてみると、彼が新しい社会秩序を創造しようと考え、その方策のひとつとしてシチズンシップ教育をとらえていたことが、なおさらよく理解することができよう。ピアードは、社会や時代と同じように、市民教養も常に一定のものではなく、いつの時代も市民たちが自分たちの力で新しく創造していくものととらえていた。同時代の成人教育論者たちの多くが、社会的危機を克服するために、すべてのアメリカ人に伝統的な教養教育を施そうと考えていたの<sup>(51)</sup>に対し、市民教養そのものを作り上げる術としてピアードがシチズンシップ教育をとらえていた点は、興味深い点である。

## 注

- (1) 若干の研究としては、倉本哲男「米国のサービslラーニングにおける市民教育論に関する研究—『アプライド・ラーニング』および『『人格教育』に関する実践分析を通して』公民教育研究(11), 2003年, 1-15頁などがあげられる。
- (2) 例えば、渡瀬典子「学校教育への「サービslラーニング」導入の意義—アメリカにおける研究動向から」『お茶の水女子大学生生活社会科学研究会生活社会科学研究』(8), 2001年, 43-56頁や、阿久澤麻理子「イギリスにおける『参加型学習』『ワールド・スタディーズ』からシチズンシップ・エデュケーションへ」『開発教育』(42), 2001年, 27-31頁などがあげられる。
- (3) Beard, C.A., *The Nature of the Social Sciences in Relation to Objectives of Instruction*, New York C. Scribner's Sons, 1934, pp21-56.
- (4) Beard, C.A., *Carnegie Corporation Office Memoranda SeriesII, Adult Education*, No. 8, Manuscript, 1924, p.4.
- (5) Beard, C.A., "Ideas: Inquiry" *Journal of Adult Education*, 9(2), 1937, p.121.
- (6) 飯村弘「ピアードに見るアメリカヒューマニズム」『アメリカ研究』3(12), 1948年, 11頁。
- (7) 同上。
- (8) 同上。
- (9) Beard, C.A., *op.cit* (1937), p.121.

- (10) *Ibid.*
- (11) *Ibid.*
- (12) *Ibid.*,p.122.
- (13) Beard, C.A., “The Need for Direction: in Social Science” *Journal of Adult Education*,5(1), 1933, p.8.
- (14) *Ibid.*,p.6.
- (15) *Ibid.*,p.8.
- (16) *Ibid.*
- (17) *Ibid.*
- (18) *Ibid.*,p.7.
- (19) *Ibid.*
- (20) *Ibid.*,p.9.
- (21) *Ibid.*
- (22) *Ibid.*
- (23) *Ibid.*
- (24) *Ibid.*,p.8.
- (25) Beard, C.A, *op.cit* (1937),p.122.
- (26) *Ibid.*
- (27) 飯村, 前掲論文, 10頁。
- (28) 同上。
- (29) Beard, C.A, *op.cit* (1933),p.5.
- (30) Beard, C.A, *op.cit* (1937),p.123.
- (31) *Ibid.*,p.125.
- (32) *Ibid.*,p.121.
- (33) *Ibid.*,p.123.
- (34) *Ibid.*,p.121.
- (35) *Ibid.*
- (36) *Ibid.*
- (37) Beard, C.A., “Practice and Culture” *Journal of Adult Education*,7(1), 1935, p.8
- (38) Beard, C.A, *op.cit* (1937),p.122.
- (39) *Ibid.*,p.124.
- (40) *Ibid.*
- (41) *Ibid.*,pp.123-124.
- (42) *Ibid.*,p.124.
- (43) *Ibid.*
- (44) *Ibid.*
- (45) *Ibid.*,pp.8-9.
- (46) Beard, C.A, *op.cit* (1935),p.8.
- (47) *Ibid.*
- (48) *Ibid.*
- (49) Beard, C.A, *op.cit* (1937),p.122
- (50) 有賀夏紀『アメリカの20世紀』(上) 中央公論新社, 2002年64-102頁。

- (51) 拙稿「アメリカ合衆国における Adult education 概念の形成過程」『日本社会教育学会紀要』No.38, 2002年, 79-88頁。拙稿「アメリカ成人教育教会の組織形成の理念-M.A. カートライトの構想を中心に」『日本社会教育学会紀要』No.40, 2004年, 61-70頁。